

分担研究報告書

地域包括ケアにおけるがん診療連携体制の構築に資する医療連携と機能分化に関する研究

研究分担者

松本 禎久 国立がん研究センター東病院 緩和医療科
後藤 功一 国立がん研究センター東病院 呼吸器内科
川越 正平 あおぞら診療所

研究要旨

超高齢社会において、がん診療連携拠点病院を中心としたがんに限定した連携体制では不十分であり、地域完結型の包括的ながん診療連携体制が必要となる。一方で、包括的ながん診療連携モデルは乏しく、地域包括ケアシステムを基盤としたがん診療連携モデルの構築が必要である。

地域包括ケアシステムを基盤とした診断・治療・併存症の治療・終末期ケアまでを含む包括的ながん診療連携モデルの開発を行うことを目的とする。平成29年度は、医療従事者、介護従事者、行政職を対象としたインタビュー調査を実施した。平成30年度は、インタビュー調査の質的分析に基づいて地域包括ケアにおける望ましいがん診療連携に関する質問紙を作成し、医療従事者、介護従事者、行政職を対象とした質問紙調査を実施した。

A. 研究目的

わが国の高齢化は、諸外国に類を見ないスピードで進行し、医療や介護の需要がさらに増加する。特に都市部において超高齢化社会への対応が急務となっている。がん診療拠点病院（以下、拠点病院）において抗がん治療を受けている患者は約6割、がんによる死亡のうち拠点病院以外での死亡は6割であり、拠点病院を中心としたがんに限定した連携体制では不十分であり、拠点病院以外の病院やかかりつけ医、高齢者向け施設との連携に基づいて行う地域完結型の包括的ながん診療連携体制が必要となる。一方で、包括的ながん診療連携モデルは乏しく、地域包括ケアシステムを基盤としたがん診療連携モデルの構築が必要である。

本研究では、地域包括ケアシステムを基盤とした診断・治療・併存症の治療・終末期ケアまでを含む包括的ながん診療連携モデルの開発を行うことを目的とする。

B. 研究方法

研究は、地域包括ケアシステムにおけるがん診療連携に関して、医療者を対象としたインタビューの質的調査、および質問紙調査による量的調査を行う。

はじめに緩和ケアおよび在宅医療に先進的に取り組んでいる東葛北部二次医療圏の拠点病院および拠点病院以外の病院、かかりつけ医、在宅医療機関、緩和ケア病棟、各市医師会、各市行政担当部門、高齢者向け施設の担当者にインタビュー調査を行い、質的分析を行う。次いで、質的研究をもとに、2年次に実施する実態調査の質問紙を作成し、当該地域における実態調査を行い、量的分析を行う。質問紙は、がん診療連携に関する現状、好ましい取り組み、課題、連携先に求めること、自機関で担当できること、課題に対する解決策についてなど多面的な内容を尋ねるものとする。

最終的には、地域包括ケアにおける望ましいがん診療連携についてのガイドを作成し、ガイドブ

ックに基づく連携モデルの実施可能性および予備的な効果を検討することを目標とする。

(倫理面への配慮)

本試験に関係するすべての研究者はヘルシンキ宣言および「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」(平成26年文部科学省・厚生労働省告示第3号)に従って本研究を実施する。

個人情報および診療情報などのプライバシーに関する情報は、個人の人格尊重の理念の下厳重に保護され慎重に取り扱われるべきものと認識して必要な管理対策を講じ、プライバシー保護に務める。

C. 研究結果

初年度である平成29年度は、地域包括ケアにおけるがん診療連携に関する質的研究を行った。東葛北部二次医療圏の拠点病院および拠点病院以外の病院、かかりつけ医、在宅医療機関、緩和ケア病棟、各市医師会、各市行政担当部門、高齢者向け施設の担当者88名にインタビュー調査を行った(表1および表2)。医療機関では医師・歯科医師・看護師・医療メディカルソーシャルワーカー・理学療法士・作業療法士など、介護施設や介護事業所においては介護福祉士や介護支援専門員など、多職種を対象とし、調査する内容は、がんに対する診療・がん以外の併存疾患に対する診療および外来・入院、検査・診断・治療・終末期ケアと多面的に調査を行った。インタビュー調査の結果を質的に分析し、がん診療連携に関する現状および望ましい取り組み、課題、連携先に求めること、自機関で担当できること、などの内容の抽出を行った。

平成30年度は、インタビュー調査の質的分析をまとめ、インタビュー調査で抽出された項目のうち重要と考えられる項目に基づき、質問紙を作成した。さらに、作成した質問紙による、医療従事者、介護従事者、行政職を対象とした質問紙調査を実施した。質問紙調査の対象は、地域包括ケアのモデル事例とされている柏市内に勤務地がある医療従事者、介護従事者、行政職とした。柏市内にあるがん診療連携拠点病院、がん診療連携拠点病院以外の病院、医師会、歯科医師会、薬剤師会、訪問看護ステーション連絡会、在宅リハビリテーション連絡会、介護サービス事業者、居宅介護支援事業者、市役所、地域包括支

援センターに協力を依頼し、郵送にて859名分の

勤務先	(人)
拠点病院	26
拠点病院以外の病院	18
地域の医療機関・介護施設・事業所・地域包括支援センター	37
行政	7
計	88

表1：インタビュー調査対象者の勤務先

職種	(人)
医師	24
歯科医師	5
看護師	17
薬剤師	7
理学療法士	7
作業療法士	1
言語聴覚士	1
社会福祉士	8
介護福祉士	2
介護支援専門員	8
その他	8
計	88

表2：インタビュー調査対象者の職種

質問紙を発送した。質問紙は無記名であり、個人を特定できないものとした。質問紙の発送1か月後に督促状を送付した。平成31年3月末の時点で質問紙は一部回収され、集計を開始している。

D. 考察

平成29年度に多職種、多機関にわたるインタビュー調査を行うことで、対象者は多くなったものの、幅広い意見を収集することが可能であったと考えられる。得られたデータから、平成30年度は質的分析を行い、がんの治療状況を考慮した、がん診療連携に関する現状および望ましい取り組み、課題、連携先に求めること、自機関で担当できること、などが明らかになり、抽出された課題や解決策が抽出された。

抽出された課題や解決策に基づいて作成した質問紙を用いて、医療従事者、介護従事者、行政職を対象とした量的調査を行うことにより、実際の状況や職種による認識の違い、優先して取り組むべき課題などが明らかになると考えられる。

平成30年度に質問紙調査を実施したが、対象は地域包括ケアのモデル事例とされている柏市に勤務先がある医療従事者、介護従事者、行政職を対象とした。これはインタビュー調査を行う中で、地域による地域包括ケアへの取り組み方や成熟度が異なると考えられたため、地域包括ケアに既に力を入れている単一の行政区域において、地域包括ケアにおける望ましいがん診療連携に関する質問紙調査を行うことが更なる向上につながる解決策を見出し得ると考えたためである。

平成31年前期には質問紙調査の量的分析を完了し、地域包括ケアにおける望ましいがん診療連携について検討を行う予定である。

E. 結論

平成29年度は、医療従事者、介護従事者、行政職88名を対象にインタビュー調査を完遂し、質的研究を行った。

平成30年度は、医療従事者、介護従事者、行政職859名を対象に、インタビュー調査に基づいて作成した質問紙による質問紙調査を実施した。今後量的研究を行い、ガイドブック作成を予定する。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Watanabe YS, Miura T, Okizaki A, Tagami K, Matsumoto Y, Fujimori M, Morita T, Kinoshita H. Comparison of indicators for achievement of pain control with personalized pain goal in a comprehensive cancer center. *J Pain Symptom Manage.* 55: 1159-1164, 2018.
2. Ishiki H, Yamaguchi T, Matsumoto Y, Kiuchi D, Satomi E. Effect of early palliative care: complex intervention and complex results. *Lancet Oncol.* 19: e221, 2018.
3. Kako J, Kobayashi M, Kanno Y, Ogawa A, Miura T, Matsumoto Y. The Optimal Cutoff Point for Expressing Revised Edmonton Symptom Assessment System Scores as Binary Data Indicating the Presence or Absence of Symptoms. *Am J Hosp Palliat Care.* 35: 1390-1393, 2018.
4. Tagami K, Okizaki A, Miura T, Watanabe YS, Matsumoto Y, Morita T, Fujimori M, Kinoshita H. Breakthrough cancer pain influences general activities and pain management: a comparison of patients with and without breakthrough cancer pain. *J Palliat Med.* 21: 1636-1640, 2018.
5. Hamano J, Takeuchi A, Yamaguchi T, Baba M, Imai K, Ikenaga M, Matsumoto Y, Sekine R, Yamaguchi T, Hirohashi T, Tajima T, Tatara R, Watanabe H, Otani H, Nagaoka H, Mori M, Tei Y, Hiramoto S, Morita T. A combination of routine laboratory findings and vital signs can predict survival of advanced cancer patients without physician evaluation: a fractional polynomial model. *Eur J Cancer.* 105: 50-60, 2018.
6. Miura T, Amano K, Shirado A, Baba M, Ozawa T, Nakajima N, Suga A, Matsumoto Y, Shimizu M, Shimoyama S, Kuriyama T, Matsuda Y, Iwashita T, Mori I, Kinoshita H. Low transthyretin levels predict poor prognosis in cancer patients in palliative care settings. *Nutr Cancer.* 2018 Nov-Dec;70(8):1283-1289
7. Miura T, Matsumoto Y, Kawaguchi T, Masuda Y, Okizaki A, Koga H, Tagami K, Watanabe YS, Uehara Y, Yamaguchi T, Morita T. Low phase angle is correlated with worse general condition in patients with advanced cancer. *Nutr Cancer.* 2019;71(1):83-88.
8. 野里洵子, 垂見明子, 松本禎久, 西智弘, 宮本信吾, 木澤義之, 森田達也, 森雅紀. 緩和ケアの研修、自己研鑽に関する若手医師の考え: 質問紙調査の自由記述の質的分析. *Palliat Care Res.* 13: 175-79,

- 2018.
9. 内田恵, 奥山徹, 明智龍男, 森田達也, 木澤義之, 木下寛也, 松本禎久. がん患者の苦痛に関するスクリーニング・トリアージを普及するためのワークショップの有用性の検討. *Palliat Care Res* 13: 273-279, 2018.
 10. 野里洵子, 宮本信吾, 森雅紀, 松本禎久, 西智弘, 木澤義之, 森田達也. 緩和ケアを専門としようとしている若手医師の研修、自己研鑽に対するニーズには何が影響するか. *Palliat Care Res* 13: 297-303, 2018.
 11. 松本禎久. 早期からの緩和ケア コトハジメ 日本での実証研究の今. *緩和ケア*. 28: 38-41, 2018.
 12. 上原優子, 松本禎久. 麻薬性鎮痛薬. *Medicina*. 55: 378-82, 2018.
 13. 松本禎久. 非がん疾患の緩和ケア. *千葉県医師会雑誌* 70: 89-90, 2018.
 14. 松本禎久. がん疼痛治療における新規オピオイド. *千葉県医師会雑誌*. 70: 260-261, 2018.
 15. 沖崎歩, 松本禎久. 看護師主導の早期からの専門的な緩和ケア～IOP (がん治療と緩和ケアの統合) に向けた介入の実際. *エンド・オブ・ライフケア* 2019; 3(1): 77-83.
2. 学会発表
1. 徳山理佐子, 荒尾晴恵, 土橋千咲, 間城絵里奈, 青木美和, 市原香織, 松本禎久. 緩和ケアに携わる医師が捉えた地域包括ケアにおけるがん患者の併存疾患に対する望ましい医療連携. Dobashi C, Arao H, Aoki M, Mashiro E, Ichihara K, Matsumoto Y Barriers as Nurses' Awareness on Cancer Treatment Coordination in Community-based Integrated Care International Conference on Cancer Nursing, 2018, September 23-26, Auckland, New Zealand.
 2. 日本緩和医療学会 第1回関西支部学術大会. 2018年11月. 大阪.
 3. 間城絵里奈, 荒尾晴恵, 土橋千咲, 青木美和, 市原香織, 松本禎久. 介護支援専門員が捉える地域包括ケアにおけるがん患者の治療中から終末期までの望ましい医療連携. 日本緩和医療学会第1回関西支部学術大会. 2018年11月. 大阪.
 4. 土橋千咲, 荒尾晴恵, 間城絵里奈, 青木美和, 市原香織, 松本禎久. 終末期を在宅で過ごすがん患者への地域包括ケアにおける障壁と望ましい連携. 第33回日本がん看護学会学術集会. 2019年2月. 福岡.
 5. 間城絵里奈, 荒尾晴恵, 土橋千咲, 青木美和, 市原香織, 松本禎久. 地域包括ケアにおいてがん診療連携に携わる医療・介護従事者が抱える障壁と課題. 第33回日本がん看護学会学術集会. 2019年2月. 福岡.
 6. 松本禎久, 小林直子, 木村芳子. 病院と地域がつながる～早期からの専門的緩和ケア提供の介入研究および実臨床での取り組みから～. シンポジウム. 日本在宅医学会第20回記念大会 (品川), 2018年4月29-30日.
 7. Matsumoto, Y. Integration of oncology and palliative care. Symposium. 第16回日本臨床腫瘍学会学術大会(神戸), 2018年7月19-21日.
 8. 松本禎久. 腫瘍学と緩和ケアの統合エビデンスとその実際. シンポジウム. 第16回日本臨床腫瘍学会学術大会 (神戸), 2018年7月19-21日.
 9. 松本禎久. メサドン～使用に際してのポイント～. シンポジウム. 日本ペインクリニック学会第52回大会 (品川), 2018年7月19-21日.
 10. 松本禎久. 再発/進行がん患者とのコミュニケーション—緩和医療医の立場から. シンポジウム. 第56回日本癌治療学会学術集会 (横浜), 2018年10月18-20日.
 11. 小林直子, 松本禎久, 沖崎歩, 増田悠斗, 古賀浩子, 田上恵太, 五十嵐隆志, 渡邊有希, 上原優子, 三浦智史, 小川朝生. 入院がん患者に対する緩和ケアチームの介入効果～症状評価スケールを用いた後方視的検討～. ポスター. 第23回日本緩和医療学会学術

- 大会（神戸） 2018年6月15-17日
12. 村田長子, 篠崎剛, 桑本麻美, 村山明子, 關本翌子, 松本禎久, 林隆一. 当院における進行頭頸部癌の死亡前1週間以内の症状と機能に関する観察研究. ポスター. 第23回日本緩和医療学会学術大会（神戸） 2018年6月15-17日
 13. 里見絵理子, 木内大佑, 松田能宣, 松本禎久, 内藤明美, 森田達也, 前田一石, 岩瀬哲. 進行がん患者の悪心嘔吐に対するオランザピンの有効性・安全性の検討: 全国大規模多施設レジストリ研究 (Phase R 悪心嘔吐研究). 口演. 第23回日本緩和医療学会学術大会 (神戸) 2018年6月15-17日
 14. 沖崎歩, 松本禎久, 小林直子, 前川智子. 多職種が関わるIOP. 口演. 第3回日本がんサポーターケア学会学術集会 (福岡) 2018年8月31日-9月1日
 15. 山本里江, 三浦智史, 松本禎久, 沖崎歩, 川口崇, 田上恵太, 森田達也. Personalized pain goal 達成と症状や Quality of Life, 抑うつとの関連について. ポスター・口演. 第3回日本がんサポーターケア学会学術集会 (福岡) 2018年8月31日-9月1日
 16. 田上恵太, 三浦智史, 川口崇, 松本禎久, 渡邊有希, 上原優子, 沖崎歩, 増田悠斗, 古賀浩, 山口拓洋, 森田達也. 生活の質と症状緩和の質との関係: Personalized Symptom Goal での検証. ポスター. 第31回日本サイコオンコロジー学会総会 (金沢) 2018年9月21日-9月22日.
 17. Shinozaki T, Hayashi R, Murata M, Matsumoto Y. Symptom prevalence and functional status among patients with advanced cancers of the head and neck. Poster. MASSC/ISOO Annual Meeting (28-30 June 2018, Vienna, Austria)
 18. Tagami K, Miura T, Kawaguchi T, Matsumoto Y, Watanabe-Sumazaki Y, Uehara Y, Okizaki A, Masuda Y, Hiroko K, Yamaguchi T, Morita T. Correlation of health-related quality of life with quality of symptom management: based on personalized symptom goals in outpatient palliative care setting. Poster. MASSC/ISOO Annual Meeting (28-30 June 2018, Vienna, Austria)
 19. Satomi E, Matsuoka H, Iwase S, Miyaji T, Kawaguchi T, Ariyoshi K, Oyamada S, Hasuo H, Tokoro A, Shinomiya T, Tsukuura H, Otake Y, Otsuka M, Hasegawa Y, Matsumoto Y, Kataoka Y, Otani H, Kidera Y, Aoyama M, Yamaguchi T. A Multi-center, Randomized, Double-blinded, Placebo-controlled Trial of Additive Effect of Duloxetine for Neuropathic Cancer Pain Refractory to Opioids and Gabapentinoids: JORTC- PAL08 (DIRECT study). Poster. ASCO Annual Meeting (1-5 June 2018, Chicago, illinois)
 20. R. Elgersma, T. Miura, Y. Matsumoto, M. Mori, F.D. Ottery, H. Jager-Wittenaar. Comprehensibility, difficulty, and content validity of the Japanese Scored Patient-Generated Subjective Global Assessment. Poster. 40th ESPEN Congress (1-4 September 2018, Madrid, Spain)

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許の取得
なし。
2. 実用新案登録
なし。
3. その他
特記すべきことなし。

